

探究する子供を育てる教育活動の創造

● 北海道教育大学附属旭川小学校 研究推進委員 ●

I 研究主題設定の理由

1 児童を取り巻く現状から

情報化やグローバル化の進展により、時代は急速に変化しており、今の子供たちやこれから誕生する子供たちが社会で活躍するであろう2030年の世界は、予測することさえも困難な状況にあります。さらには、人工知能(AI)、ビッグデータ、Internet of Things(IoT)、ロボティクス等の高度化した先端技術により、社会の在り方そのものが「非連続的」と言えるほど劇的に変わることを示唆するSociety5.0の到来も、現実味を帯びています。

しかし、そうした劇的な変化の中であっても、人間らしく豊かに生きていくために必要な力は、これまで誰も見たことのない特殊な能力では決してありません。どのような時代の変化にあっても、知識・技能、思考力・判断力・表現力をベースとして、自己の主体性を軸にした学びに向かう一人一人の能力や人間性が問われることが指摘されています。

急激に変化する時代だからこそ、人間としての強みが何であるのかを再認識した上で、新しい未来を切り拓いていく力が求められます。人間の強みは、現実世界を理解し、その状況に応じた意味付けができることです。飛躍的な進化を遂げるAIを脅威と見なすのではなく、人間の能力を補助、拡張し、可能性を広げる有用な道具として捉え、AIやデータの力を積極的に活用していくことが、新しい未来を切り拓いていくことにつながります。そうした新たな社会を牽引していくような力が、今の子供たちやこれから誕生する子供たちには必要な力であると言えます。

2 学校教育の今日的課題から

これからの時代を生きる子供たちには、単に社会の変化に受け身で対応するのではなく、変化を前向きに受け止め、自分たちが考える、より豊かな社会の実現に向けて主体的に動いていくことが求められます。そのためには、必ずしも既存の社会的な枠組みや価値観に捉われることなく、様々な変化を柔軟に受け止め、感性を豊かに働かせながら、どのような未来をつくっていくのか、どのように社会や人生をよりよいものにしていくのかを考え、新たな価値を積極的に創り出していくことが重要です。

新学習指導要領の全面実施を迎えた今、学校教育には、子供たちが様々な変化に向き合い、他者と協働して課題を解決していくことや、様々な情報を見極め意識の概念的な理解を実現し情報を再構成するなどして新たな価値につなげていくこと、複雑な状況変化の中で目的を再構築することができるようにすることが求められます。

3 本校の教育研究の経緯と、前研究における成果と課題から

本校教育研究においては、これまで「全教科・領域研究による知・徳・体の調和のとれた子供の育成」を基盤とした教育課程研究を進めてきました。

【本校の研究経緯】

○平成19年～平成22年「自ら未来を築く子供を育てる教育活動の展開」

○平成22年～平成25年「自ら学びを創造する子供を育てる教育活動の展開」

○平成25年～平成28年「自ら学び，考え，行動する子供を育てる教育活動の創造」

○平成28年～令和元年「学びをつなぐ子供を育てる教育活動の創造」

前研究「学びをつなぐ子供を育てる教育活動の創造」における成果と課題について、次のように整理しました。

成果の1点目として、本校で育てたい6つの資質・能力を基軸として、単元及び題材で身に付ける資質・能力，他教科・他領域との関わり等を想定した学習づくりによって、学ぶ意義が明確になったこととともに、発展性，創造性を伴う学びへとつなげられたことが挙げられます。

2点目として、複数の教科・領域における学びのつながりを強く意図した明示的な指導や学習環境の工夫等により、学びをつなぐ子供の育成につながったことが挙げられます。さらに、授業改善においては、学習段階に応じた指導や交流場面の在り方によって、児童同士をつなぐことにも効果的であることが分かりました。

3点目として、学びをつなぐ子供の姿を具体化し、評価に生かしたことで、学びの過程や資質・能力を的確に見取るとともに、適切な指導につながったことが挙げられます。

変化の激しい時代を生き抜く子供たちにとって、前研究で育成した「学びをつなぐ力」の必要性が明らかになった一方で、その力を、子供たち自身が生きて働かせることのできる力へと高めていくことが、今後の研究課題として浮かび上がってきました。

具体的な課題としては、育成を目指す資質・能力が一つの単元及び題材にとどまらず、より大きなくくりにおける資質・能力として具体化させることと、その育成につながる学習デザインを検討していくことが挙げられます。また、一人一人の学びに焦点を当てた評価のために、見通しと振り返りの在り方についての検討も、課題として挙げられます。

Ⅱ 新たな研究の方向性について

1 本研究で明らかにしようとしていること

これまでの本校の教育研究は、学校教育目標である「主体的人間の形成」の具現化を図るために進められてきており、これは新たな研究についても同様です。

これまでに述べた、児童を取り巻く現状や学校教育の今日的な課題，前研究の成果と課題等を踏まえて、本研究では、子供たちにとって、学ぶ必要感や学びに向かう意欲を引き出し、より一層知りたい，考えたいという推進力のある学びを実現し、子供たち自身が、自分らしく学びを進めることができる力を育成する必要があると考えました。

こうした力は「生涯にわたって能動的に学び続けることができる力」であり、その育成に当たっては、問題解決的な学習を進めていく中で、見通しと振り返りを繰り返しながら、問題解決的な学習を連続させていくような「探究」を軸とした研究を進めていく必要があります。そこで、研究主題を「探究する子供を育てる教育活動の創造」と設定しました。

2 本研究で求める子供の姿

苫野(2019)は、「探究する力」について、「現代に限らず、どんな時代においても『自由』に生きるための根源的な力と言うべき」であるとし、次のように述べています。

自分(たち)なりの問いを立て、自分(たち)なりの仕方、自分(たち)なりの答えにたどり着く、探究する力

とりわけ、劇的な変化の中にある現代社会において、この「探究する力」の必要性は増しており、その重要性は切実さを増し、社会的にも共有され始めていると言えます。

この「探究する力」を踏まえ、本研究で求める「探究する子供」の姿を、次のように設定しました。

自ら「問い」を見だし、その解決策を模索し続け、遂行する力を身に付けた姿

探究の軸となるのが、「問い」です。この「問い」は、各教科・領域の特性等により、「問題」「課題」「めあて」のように多岐に渡ると考えます。いずれにせよ、個々の児童に探究の原動力となる「問い」があること、その「問い」が他者から与えられたものではなく、自ら見いだしたものであることが重要だと考えました。

また、見いだした「問い」の解決策は、すぐに明らかになるとは限りません。よりよい解決策を模索する過程で、より本質的な「問い」を見いだしたり、新たな「問い」を見付けたりすることもあります。そうした連続的な問題解決の過程を繰り返すことが、本研究の目指す「探究」であり、その過程を遂行する力を身に付けた姿を、「探究する子供」の姿と設定しました。

これは、苫野が示す「探究する力」の理念を踏まえたものであるとともに、本校が目指す推進力のある学びを実現し、自分らしく学びを進めることにつながるものと考えます。

この「探究する子供」の姿を受けて、各教科・領域の学習において「探究する子供」の姿を具体化し、研究を進めました。

Ⅲ 主な研究内容及び研究計画

本研究における主な研究内容は、次の3点です。

- 1 各教科・領域における、「探究型の学び」を位置付けた学習デザイン
- 2 探究する子供を育てる、各教科・領域の授業づくり
- 3 探究する子供を育てる学習評価

上記に示した主な研究内容を基に、本研究における3年間の主な研究内容を、次のように設定しました。なお、研究1年次は研究の構想期、研究2年次は研究の実践期、研究3年次は確立期と押さえます。

各年次の研究テーマ	主な研究内容
1年次 「問い」の発生に焦点を当てて	各教科・領域における「探究」の押さえの明確化 探究する子供を育てる学習デザイン
2年次 各教科・領域における「探究型の学び」	各教科・領域における「探究型の学び」 探究に向かう子供を育てる学習づくり
3年次 子供が探究する学習づくり	単元設計と授業デザインをつなぐ評価 探究する子供を育てる学習づくり

【1年次の研究】 「問い」の発生に焦点を当てて

1年次研究では「問い」の発生に焦点を当てて、各教科・領域における研究を進めました。研究を進めた結果、児童と教材の出会いの場面における教材提示（問題提示を含む）の手法や交流活動の設定といった指導の工夫が、児童自身が「問い」を見いだすことに効果的であることが分かりました。

教材提示の手法については、試行活動の設定や目的に応じた思考ツールの効果的な活用、自ら問いを見いだすために条件を操作した問題提示、教材そのものや提示方法の工夫等が、「問い」を見いだし、主体的な学びを実現するために効果的であることが確認できました。

交流活動の設定については、自らの考えを整理した後に、ペア交流や全体交流を設定することにより、自他の考えを比較して確かなものにしたたり、学習活動の方向性が定まったりするといった効果が、複数の教科・領域において確認できました。さらに、交流活動をより充実させるために、活動の主体を児童に委ねるといった教師の姿勢が必須であることも明らかになりました。

その一方で、児童一人一人が見いだした「問い」と学級全体の「問い」、さらには教師が想定した「問い」が乖離しているのではないかという課題も見えてきました。また、「探究型の学び」を実現する評価については、新観点に基づいた評価の在り方を含めて、より一層研究を進める必要があります。

【2年次の研究】 各教科・領域における「探究型の学び」

2年次研究においては、各教科・領域における「探究型の学び」の在り方について研究を進めました。

研究を進めた結果、「探究の文脈を意図した単元構成」「振り返りの蓄積と教師による見取りを関連付けた学習評価」といった視点において、複数の教科・領域の実践で成果を得ることができました。

総合的な学習の時間では、「①課題の設定→②情報の収集→③整理・分析→④まとめ・表現」の探究のプロセスが示されています。この探究のプロセスを礎とし、単元導入部の構成を確立したり、授業と授業を児童の「問い」でつなぎ、問題解決の過程を繰り返したりする単元構成の工夫が、各教科・領域らしさを生かした「探究型の学び」の実現に効果的であることが確認できました。単元・題材の学習を探究の文脈へと方向付けるために、1年次研究において研究の焦点を当てた「問い」を有効活用した実践の蓄積ができたことも、本次研究における大きな成果であると言えます。

また、GIGAスクール構想実現のために配備された一人一台端末によって、児童の振り返りをタブレット端末に蓄積することが容易になりました。蓄積された児童の振り返りを「学習ログ」として活用し、児童自身が自らの学びを自覚するために活用するとともに、教師が個の学びを適切に見取り、指導の改善に生かしていくことで、児童が自分らしく学びを進める学習改善につながることを確認できました。

その一方で、信頼性と妥当性を兼ね備えた学習評価の在り方が、改めて問われていることも明らかとなりました。学習評価の質を高めることは、探究を推進していく上でも必須の研究課題であると言えます。さらに、真の探究とは学校での学びにとどまるものではありません。教科・領域での学びと日常生活のつながりを実感したり、日常生活における問題の発見・解決に進んで取り組もうとしたりする子供の姿を実現することが、真に探究する子供を育成することであると考えます。

【3年次の研究】 子供が探究する学習づくり

最終年次である3年次研究では、「子供が探究する学習づくり」をテーマに研究を進めます。1年次研究で取り組んだ「問い」、2年次研究で取り組んだ「探究型の学び」の研究成果と課題を総括し、真に探究する子供を育成するための学習づくりの実現を目指します。

1年次、2年次ともに、「学習評価の在り方」は我々が常に問い続けてきた課題です。連続的な問題解決の過程を、自ら繰り返す探究する力を身に付けるためには、子供自身が自らの学びを振り返ることとともに、教師による見取りとフィードバックの質の向上が求められます。質の高い学習評価の在り方を明らかにすることは、本研究における大きな課題であると言えます。

また、各教科・領域らしさを生かした学びの先に、真に探究する子供の姿の実現があると考えます。学校での教科・領域等の学びにとどまることなく、柔軟に日常生活との関連を問い続け、自らの人生をよりよくするために探究し続ける児童の育成を目指した学習デザインの提案を目指します。

IV 参考・引用文献

- ・小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 総則編 文部科学省 平成29年6月
- ・Society5.0に向けた人材育成～社会が変わる，学びが変わる～
文部科学省 平成30年6月
- ・「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す，
個別最適な学びと，協働的な学びの実現～（答申） 中央教育審議会 令和3年1月
- ・初等教育資料 No. 972 特集 I 「新たな価値を生み出す豊かな創造性とは」
文部科学省 東洋館出版社 平成30年10月
- ・平成29年度版 小学校 新学習指導要領ポイント総整理 総則 奈須正裕編著
東洋館出版社 平成29年9月
- ・EdTechが変える教育の未来 佐藤昌宏 インプレス 平成30年10月
- ・「学校」をつくり直す 苫野一徳 河出書房新社 平成31年3月